

学術手話通訳に求められる訳出スキルに関する予備的検討

—ろう通訳者を講師とした日本手話翻訳研究講座の記録から—

○中野聡子¹⁾ 原大介²⁾ 金澤貴之³⁾ 川鶴和子¹⁾ 細井裕子¹⁾ 望月直人¹⁾ 楠敬太¹⁾ 伊藤愛里⁴⁾

1)大阪大学キャンパスライフ健康支援センター 2)豊田工業大学工学部 3)群馬大学教育学部 4)大阪教育大学大学院

KEY WORDS: 学術手話通訳 ろう通訳 日本手話

1. 問題の所在と目的

「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」(障害者差別解消法)の施行により、今後、高等教育機関において手話通訳支援の提供も増加すると予想される。地域の手話通訳者団体などで学術手話通訳に関する研修を開催するところも出てきているが、こうした場面でどのような通訳が求められているのか試行錯誤の状態にある。

手指英語を使用する聴覚障害学生であってもアメリカ手話の通訳のほうが内容に対する理解度が高かったという研究報告(Murphy and Fleischer, 1975)から、我々は日本手話を母語もしくは第一言語とするろう者の通訳(ろう通訳)をモデルとし、学術手話通訳に求められるスキルを明らかにして、そのトレーニングのためのウェブコンテンツ作成を目指している。

本研究では、国立障害者リハビリテーションセンター大学院手話通訳学科教官の木村晴美氏を講師として、地域の手話通訳者らを対象に講座を開催し、学術手話通訳に求められる訳出スキルとは何か、予備的検討を行った。なお、木村氏は、学術手話通訳に関する深い見識と養成経験をもち、また自身ろう通訳者として活動している。

2. 方法

対象者: O 大学で開催した 2017 年 1 月 21 日の日本手話翻訳研究講座に参加した地域の手話通訳者ら 28 名のうち、題材部分について手話翻訳を行った 7 名。全員、手話通訳士資格もしくは都道府県登録手話通訳者資格を有し、高等教育機関など高度専門領域での手話通訳経験がある。対象者には倫理的配慮及び個人情報の取り扱いに十分な留意をする旨を説明し、同意書の提出をもって了解を得た。

題材: 2014 年 4 月 10 日に行われた O 大学の共通教育の授業「国語学」(90 分)から、学術的内容を適切に伝えるには高度な訳出スキルが必要だと思われる 3 箇所を 1 分 23 秒～1 分 44 秒で抽出し、題材とした。

方法: 参加者にはあらかじめ授業全体の音声と文字化したデータを電子メールで送付し、事前準備を指示した。当日は、1 箇所につき、1～3 名の手話通訳者が動画再生(音声とスライド)にそって手話翻訳を行い、講師の木村氏がモデルの訳出およびコメントを行った。2 時間の講座は手話通訳者の訳出表現も含め、すべてビデオカメラに記録し、日本手話の言語学的知識を有する大学教員、手話通訳士資格をもつ手話通訳者など計 4 名で書き起こした。

3. 結果

講師のモデル訳出表現と手話通訳者に対するコメントから、学術手話通訳に求められる訳出スキルは以下の 4 点に集約されると考えられた。

(1) 必要に応じた原語(日本語)借用

日本語の動詞の否定に関する歴史的変化や方言に関するトピックスが含まれているため、原語借用がポイントとなる。マウジング(原語の口形の強調)と原語借用であることを示す NM マーカーの表示が必要である。

例) 書かん: 書く ない NM:否定 M:カカ

口形が「カカナイ」となっている手話通訳者がおり、現在の西日本では「ン」と連体形で終止されていることが訳

出表現ではわからなくなってしまっていた。

(2) 話者の態度

言語的、非言語的に伝えられる話者の態度(判断)は論旨の理解に重要な役割を果たす。例えば、「終止形がもう使われなくなって連体形で文を終止するようになったっていうね。そういう現象があるんです。」という原文で、手話通訳者は単なる事実の伝達として訳出していたが、講師は、「ある」の手話単語の強調及び断定の NM マーカーを使用して表すべきであるとした。

(3) 視覚的資料(スライド)の効果的利用

正確に専門用語や日本語の字句を伝え、また同時通訳の時間的ロスを防ぐために、スライドの提示を積極的に活用することが重要である。その際、ただ指さしをするだけでなく通訳者自身による視線誘導が必要だが、手話通訳者には視線誘導が欠けていることが多かった。

(4) 講義の流れや論理展開の明確な伝達

講師の訳出及びコメントから、論理展開をわかりやすく明確に伝えるためには、「空間構成」「CL 表現」「NM 表現」がポイントになると考えられた。下記に例を示す。いずれも、手話通訳者の訳出表現にはみられないものであった。

A1 [古代 NM:強調・意味 否定 PS^ 「ズ」「ヌ」 2 つ ある] CL^時代が移る A2 [中世 「ヌ」 なる 終わり(完了のアスペクト) CL^ 「ズ」が消え「ヌ」残る] CL^時代が移る A3 [今 NM:強調 「ン」]

(古文で「ズ」と「ヌ」があって、それが中世になって「ヌ」になって、今日「ヌ」が「ン」になっている。)

- ① 空間構成: 古代を左側(A1)、中世を中央(A2)、現代を右側(A3)とするタイムライン上で変化を表出することで論旨がつかみやすくなっている。
- ② CL 表現: 古代から中世、中世から現代への時代の変化や、中世になって否定の「ズ」が消滅する現象などが CL 表現で表されている。
- ③ NM 表現: 講師の訳出表現では、語の意味に付随して、手の動きの強弱だけでなく NM マーカーが同時に生起している。また、論理展開として否定形の時代変化を追ってきて、「今は」というところに強調の NM マーカーが生起している。

4. 考察

学術手話通訳では、利用者がその専門分野に関する基礎知識を有していることを強く意識する必要がある。特に専門面に関しては原語借用を適切に行わなければならない。その一方で翻訳の等価性を維持しつつ、音声言語である日本語と視覚言語である日本手話の特性を考え、手話言語として論旨展開を明確にする訳出スキルを身につける必要がある。事前準備はもちろん重要であるが、それだけでなく日本手話の言語スキルそのものをさらに磨くことが大切であると考えられた。

付記: 本研究は科研費基盤(B)16H03813、三菱財団の助成による。

(NAKANO Satoko, HARA Daisuke, KANAZAWA Takayuki, KAWATSURU Kazuko, HOSOI Yuko, MOCHIZUKI Naoto, KUSUNOKI Keita, ITOH Airi)